

実践報告：「金沢大学ボキャブラリーコンテスト2022」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 家口, 美智子, 西嶋, 愉一, 菅野, 磨美, 大藪, 加奈, YAGUCHI, Michiko, NISHIJIMA, Yuichi, KANNO, Mami, OYABU, Kana メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069175

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



実践報告：「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」 A Report on “Kanazawa University Vocabulary Contest 2022”

家口美智子*、西嶋愉一*、菅野磨美*、大藪加奈*

Michiko YAGUCHI, Yuichi NISHIJIMA, Mami KANNO and Kana OYABU

概要

本稿では 2022 年度に国際基幹教育院外国語教育部門が主催した「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」の実践報告と参加者のアンケート分析を行う。語彙力を競うコンテストは、高等学校や大学で行われているが、実施方法を示した実践報告や参加学生へのアンケート結果を分析した論考はほとんどない。そこで、本稿では、上記ボキャブラリーコンテストの実施方法と、参加学生に行ったアンケート結果を報告する。アンケートの回答より、このイベントに参加した学生は、コンテストの実施や継続に肯定的な意見を持っていることが分かった。考察ではコンテスト開催意義としてやる気のある学生の在学中の自学自修支援としての位置づけと、卒業後を見据えた学生の英語力向上支援の二つの面があることを述べ、このアンケート結果を受けて、2022 年度に新たな教育組織として設置された金沢大学未来創成教育環（教養教育・専門教育・大学院教育の枠組みを超えた一貫教育体制の構築を目指す教育組織）において、今後も継続してコンテストを開催することの意義と、年に 2 回行うことの必要性を述べる。

1. はじめに

語彙力を競うボキャブラリー・コンテスト（以下ボキャコン）は、日本では高等学校や大学で行われており、その実施についてインターネット上で報告している学校もある（例：名古屋工業大学、八戸工業専門学校、長崎外国語大学、金沢二水高等学校、兵庫県祥雲高等学校、岡山東商業高校）。多様な高等学校や大学で行われていることから、学生の英語力にかかわらず実施可能な英語関連イベントとして開催されていると言える。

しかし、ボキャコンの実施方法や参加学生の意識調査に関する報告や論考は少ない（例外：白井，2012；宮島，2012）。そこで、本稿では 2022 年度に金沢大学で開催された「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」についてその実施報告と総括的な実施意義の検証を行う。

「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」は、金沢大学で 2022 年度設置された教育組織「未来創成教育環」（教養教育・専門教育・大学院教育の枠組みを超えた一貫教育体制の構築を目指す教育組織）で 2024 年度から展開する 2 年生以上対象の英語学術リテラシー科目と共に、全学的に学習意欲のある学生の英語力を上げるための方策と位置づけられた。このコンテストは、イベント型自学自修支援活動のパイロット研究として行われた。本稿では、まず実施概要を説明し、どのような学生が参加したか、そして参加学生がボキャコンにどの

* 著者は全員金沢大学国際基幹教育院外国語教育系所属。

ような感想を持ったかについてアンケート調査を行った結果の報告と考察を述べる。また、今後未来創成教育環で行う事業として、どのような活用方法があるのかについての提言も行う。

2. ボキャブラリーコンテスト実施の理論的背景

「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」は、学生の自律的学びを支援するイベントとして企画された。言語教育に関わる学習者の自律性については、Littlewood (1996) が述べたように、自ら学ぼうという前向きな気持ち (willingness) と自ら学ぶことができる能力 (ability) が必要である。学生の自律性には、授業で与えられた課題などに自分で取り組むという意味での自律性 (reactive autonomy) と、授業や単位などの枠組みがなく自ら何を学ぶ必要があるか考え、どのように学ぶか自分で決めて学べるという意味での自律性 (proactive autonomy) があるが (Littlewood, 1999)、当該ボキャコンは授業や単位とは関係がなく、参加したいと考える学生が自ら参加を決めて登録・参加しており、自律的学修に必要な意欲と積極性を持つ学生を対象としたイベントと言える。

もちろん、完全に自律学修が可能で、教員等による外からの関与を必要としない学生には何の働きかけもいらないだろう。しかし、多くの学習者にとって自律学修を継続するための環境として、自律的な行動を選択する機会が与えられることが重要である (Ryan, 1991)。自己決定理論 (self-determination theory) が説明するように、自ら学び成長しようとする力が意欲となって行動をおこし、その結果高い成果に結びつくのは、自分で行動を選択できることや楽しんで行えることで、内的動機付けが可能になるからである (Ryan & Deci, 2002)。

楽しみながら行える内的動機付けとして「競争」が有効であることはこれまでも報告されており (Milstein et al., 2022)、最近ではオンラインゲームを使った学習成果に関する報告も増えている。(例えばオンライン語彙コンテストについては Liu et al. (2022) を参照されたい。)「競争」には一般的にモチベーションを高める効果と、一部学力の低い学生の学修意欲をかえって下げる問題があるが、対面式で賞金が出る形態の今回のボキャコンは、登録・参加に金銭的負担がなく、成績上位者が表彰されるだけでそれ以外の参加者の成績は公表されないため、参加することで被る精神的も少ない。その意味で、学生の参加経験にネガティブな影響を与えず、「ちょっと楽しいイベント」としてまた受けてみたいという気持ちを起こすことを想定して開催した。

3. 「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」の概要と結果

「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」は国際基幹教育院外国語教育部門によって2022年10月11日6限(18:15~19:45)に開催された。部門の英語教員3名が実行委員を務め、部門の英語教員全員(14名)の協力を得て実施し、自修支援サービスを提供する附属図書館との共催となった。本節では、「募集方法と参加学生」、「問題作成」、「表彰と賞金」について、このイベントの概要を説明する。

3.1. 募集方法と参加学生

このイベントのために、以下の広報活動を行った。

1) 学内ポータルメッセージ

金沢大学の学内ポータル「アカンサスポータル」で 2022 年 7 月 11 日に全在學生にイベントの案内と参加募集のメッセージを送った。

2) ポスター・チラシ・配布物

イベントポスター（巻末 1）を各学類、附属図書館、学生会館食堂付近の掲示板および学生協書籍販売部で販売されたコンテスト用指定図書陳列棚付近に貼った。附属図書館と教養教育が行われる総合教育講義棟のラウンジにはチラシを置いた。8 月第 1 週に行われた教養教育英語科目「TOEIC 準備コース」の期末テスト後の配布物にコンテストの情報を載せた。

3) 教員による宣伝

教養教育の英語科目を担当する教員に、授業での周知を依頼した。

4) SNS

附属図書館から Twitter で参加を呼び掛けるツイートを発信した。

後述のアンケートで、参加した学生にどの周知方法で当該ボキャコンを知ったか調査したところ、52.2%の学生がポータルメッセージで、45.0%がポスターで、35.9%が教員による口頭による宣伝で、13.0%が教員による配布物で、8.7%がチラシで、5.8%が友人からの紹介であったと答えた。ポータルでのメッセージは実行委員会が予想したより周知方法としては影響力が小さく、ポスターの効果は予想よりも大きかった。（ポータルメッセージは他の大学発信情報に埋もれてしまうのに対して、ポスターは貼られた場所を何度か通るうちに気づいたり、通るたびに繰り返し目につく、という点で有効であったかもしれない。）

エントリーは、オンラインで行った。学生はイベントサイトの QR コードをスマートフォンなどで読み取って Google Form で申し込んだ。

エントリー締切の段階で 147 名の学生が登録を行った。以下が参加の意思を示した学生の内訳である。実数としては 1 年次 79 名、2 年次 28 名、3 年次 22 名、4 年次以上 18 名であった。

グラフ 1 : 登録学生の学年による内訳

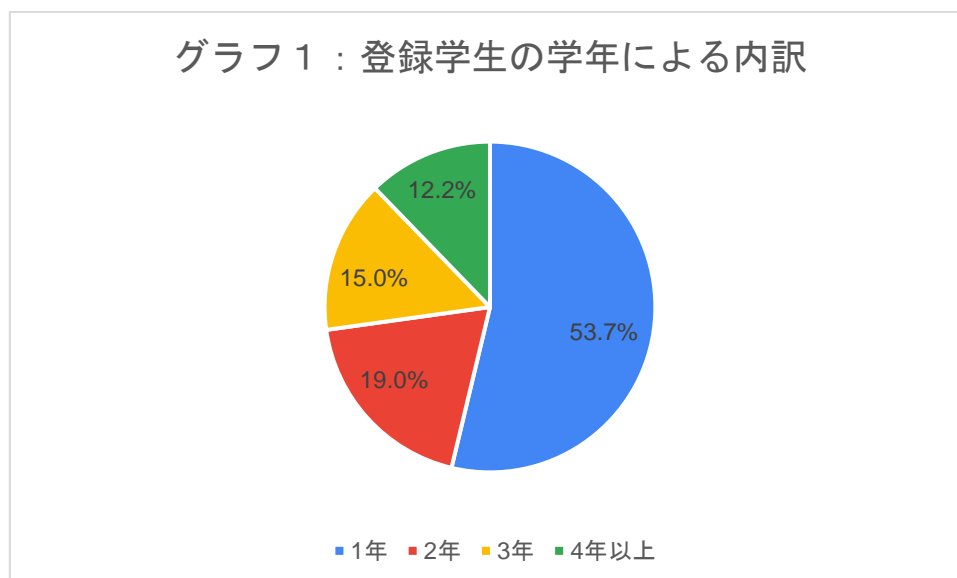


表 1 ではこの 147 名の学域・学類ごとの割合を見る。

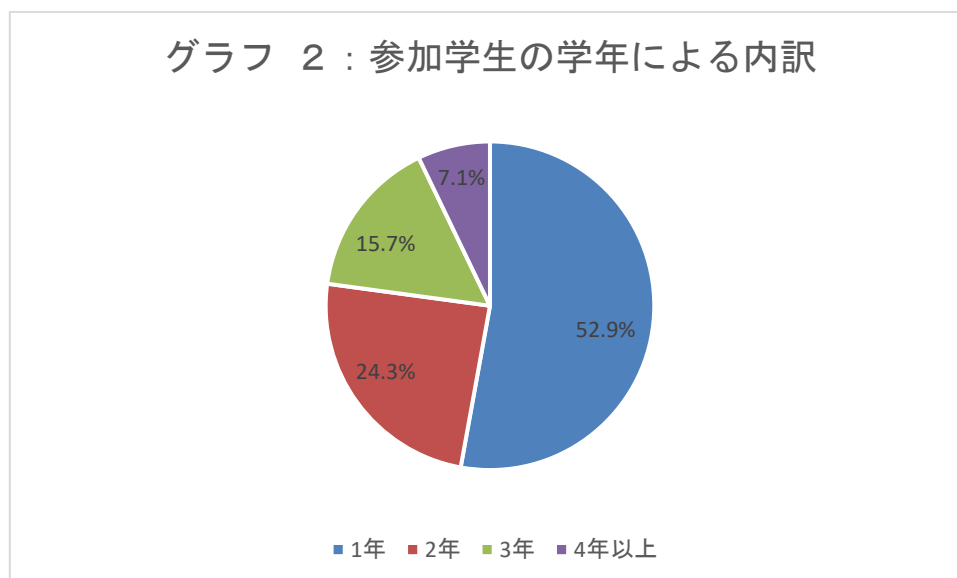
表 1 : 登録学生の学類による内訳

フロンティア工学類	6	学校教育学類	19
理工 3 学類	6	経済学類	8
機械工学類	1	法学類	10
地球社会基盤学類	2	国際学類	20
数物科学類	4	人文学類	13
生命理工学類	8	地域創造学類	9
物質化学類	3	総合教育部文系	13
先導学類	10	総合教育部理系	2
医学類	6	計	147
薬学類	3		
保健学類	4		

表 1 によると、海外志向があり英語学習に関心のある国際学類の学生からの参加は予想されたとおり多かったが、学校教育学類、総合教育部文系の学生もそれぞれの学類学生が全学生に占める割合に比べて目立って多かった。理系の学生の参加希望も少なくなく、全学生の 37.4% (55/147) は理系（総合教育部理系を含む）の学生だった。

実際に参加した学生は 70 名であった。参加した学生の学年内訳は、1 年次 37 名、2 年次 17 名、3 年次 11 名、4 年次以上 5 名であった。

グラフ 2：参加学生の学年による内訳



参加学生の学類内訳は以下のとおりである。

表 2：参加学生の学類による内訳

フロンティア工学類	1	学校教育学類	14
理工 3 学類	2	経済学類	5
機械工学類	1	法学類	5
地球社会基盤学類	0	国際学類	10
数物科学類	2	人文学類	7
生命理工学類	3	地域創造学類	4
物質化学類	1	総合教育部文系	7
先導学類	3	総合教育部理系	0
医学類	1	計	70
薬学類	2		
保健学類	2		

グラフ 2 と表 2 より参加学生は登録学生と同じような傾向を示していることがわかる。詳しい考察は 4 節で行う。

3.2. 出題問題と想定得点

コンテストの問題は『TOEIC L & R Test 出る単特急 金のフレーズ』（朝日新聞出版）から 80%出題すると学生に周知した。問題は 100 問を 50 分で解かせた。国際基幹教育院の外国語教育系の英語教員全員が問題作成を行った。形式としては、全問 4 択で正答は 1 つである。以下が実際に出題された問題の例である。

They _____ the old building into a wonderful modern home.

(A) transformed (B) boosted (C) pursued (D) struggled

Which factor can be identified as a mitigating influence for climate change?

(A) increasing harm (B) supporting harm (C) decreasing harm (D) doing harm

文中の下線部に入る単語を選択する、あるいは文中の下線を引かれた単語の意味や同義語、反意語を選択させる問題を基本とした。(問題のタイプはイベント案内時に提示した。)

実行委員は平均点 70 点を目標に、外国語教育部門の英語教員が作成した問題を取捨選択し、課題本に使われていない問題も付け加えた。70 点としたのは、課題本にある単語を完全に修得した場合は、80 点は取れるだろうという想定のもと、学習が不十分であった学生が解いても 60 点くらいを取れる手ごたえがないと、ポキャコンに参加したことに意義を見出しにくいのではないかと考えたからである。また、満点が複数名出ると賞金の配分が難しくなるので、数問は難易度の高い問題を出した。

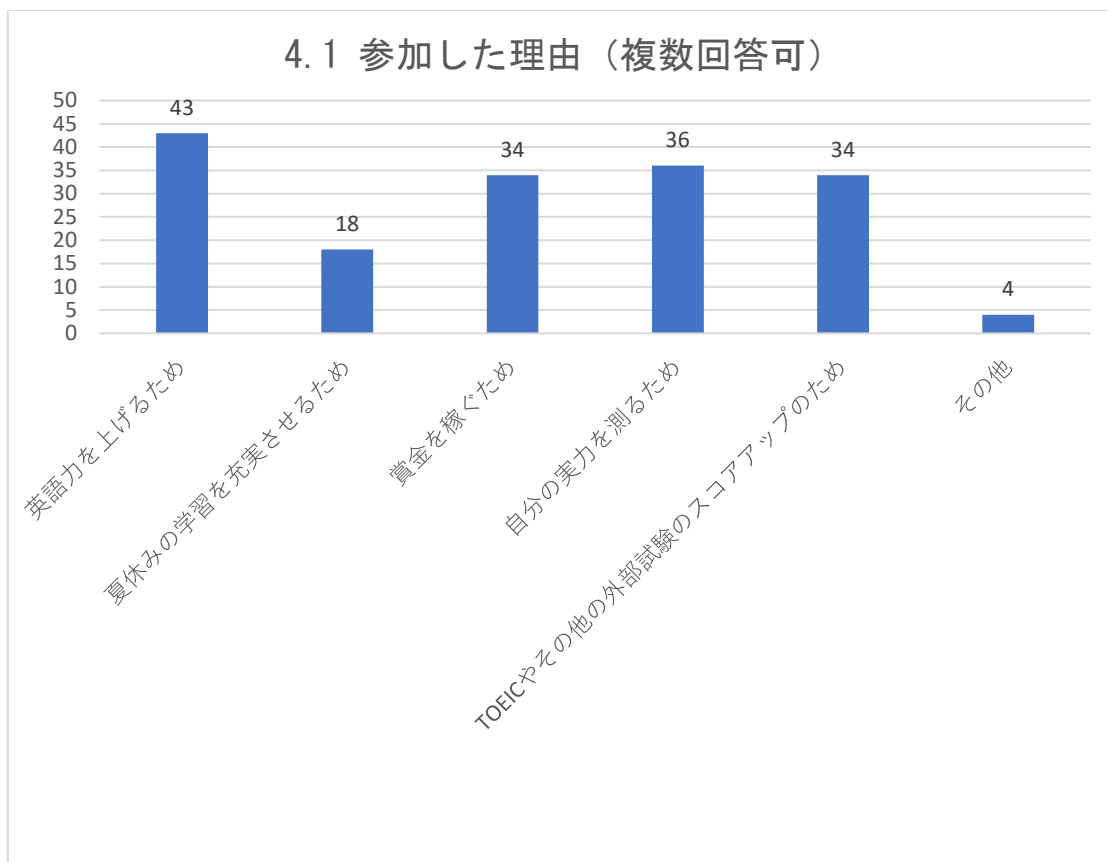
3.3. 得点の算出と表彰・賞金

試験はマークシート方式で行い、カードリーダーで得点を算出した。具体的には、スキャネット株式会社の「スキャネットシート」を用いて、スキャナ ScanSnap を使って専用ソフトの「らく点マーク君 3」で読み取り、採点した。記入漏れ等の問題もなかったため、得点や順位はテスト終了後 15 分程度で確定できた。表彰対象者の得点と順位を発表した後、すぐ表彰式を行った。1 位は 90 点台、2 位から 6 位までは 80 点台、7 位から 12 位は 70 点台後半の得点を獲得した学生の計 12 名が表彰の対象者となった。1 位 1 万円、2 位 7 千円、3 位 5 千円、4 位から 11 位 3 千円 (11 位が同点で 2 名いたため、計 9 名) という基準で、QUO カードの形で賞金を手渡した。表彰状の授与はなく、希望者に証明書の発行をすると知らせたところ、後日 3 名の学生が証明書を希望したため付与した。また、共催の図書館の会報誌『こだま』の 212 号 (2023) に、3 名の入賞者と 9 名の受賞者の氏名が掲載された。

4. アンケートの結果

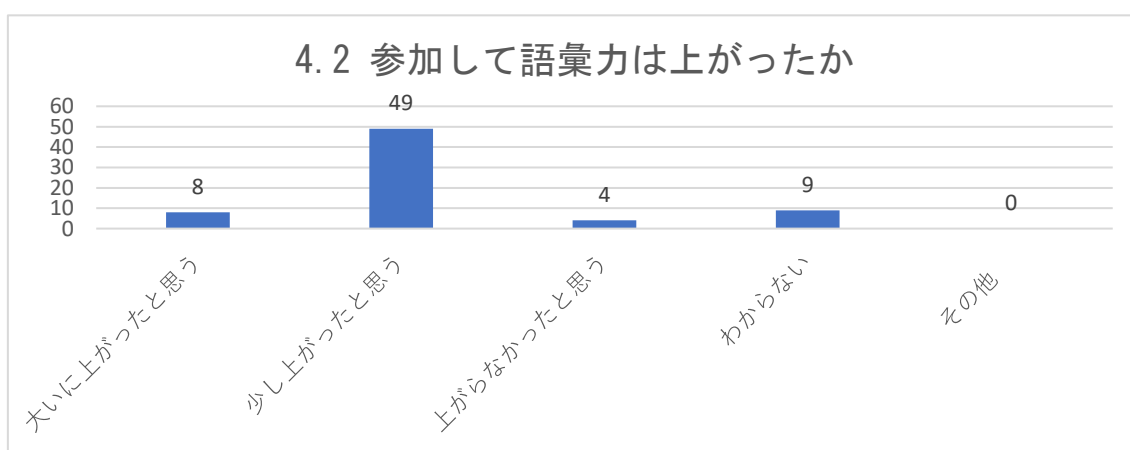
本節では参加学生にテスト後、採点結果の提示までの空き時間に行ったアンケートの結果を見る。実際のアンケート用紙は、巻末にあるので見られたい。ここでは、主な質問の結果だけを提示する。考察は 4 節で行う。データは 70 名の全学生の中で、該当の答えを選んだ学生の実数である。総計が 70 名に達していないデータは、アンケート用紙の裏のページの質問に回答していないなどの無効回答があったためである。

4.1 今回のボキャブラリーコンテスト（以下ボキャコン）に参加した理由を選んでください。
（複数回答可）



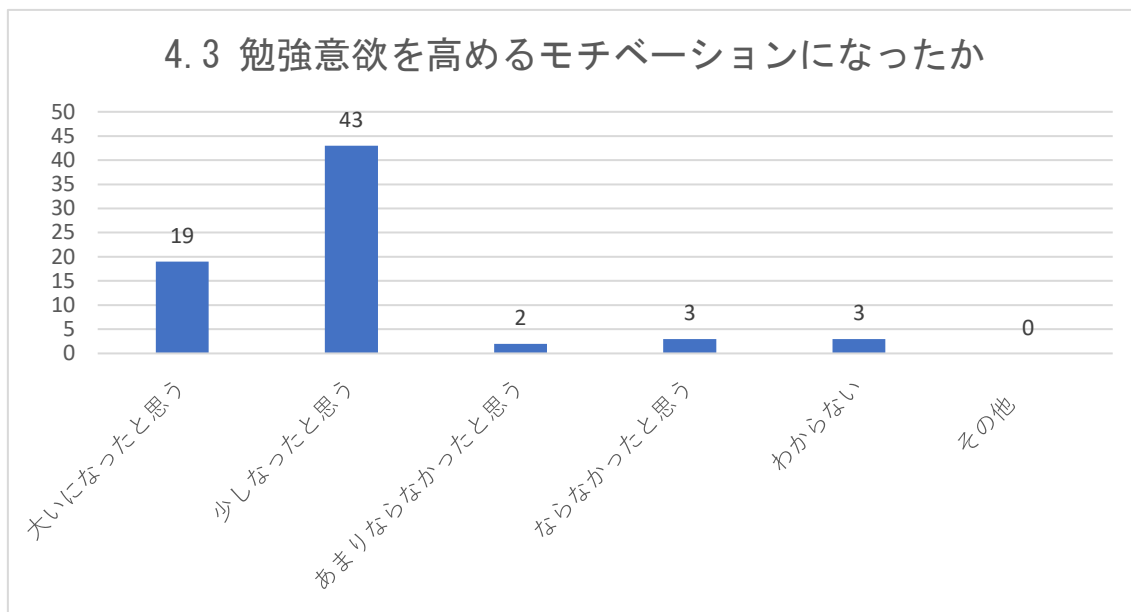
「英語力を上げるため」が一番多く、「自分の実力を測る」や「外部試験のスコアアップ」「賞金を稼ぐ」も多かった。

4.2 ボキャコンに参加して語彙力が上がったと思いますか？ 1つを選んでください。



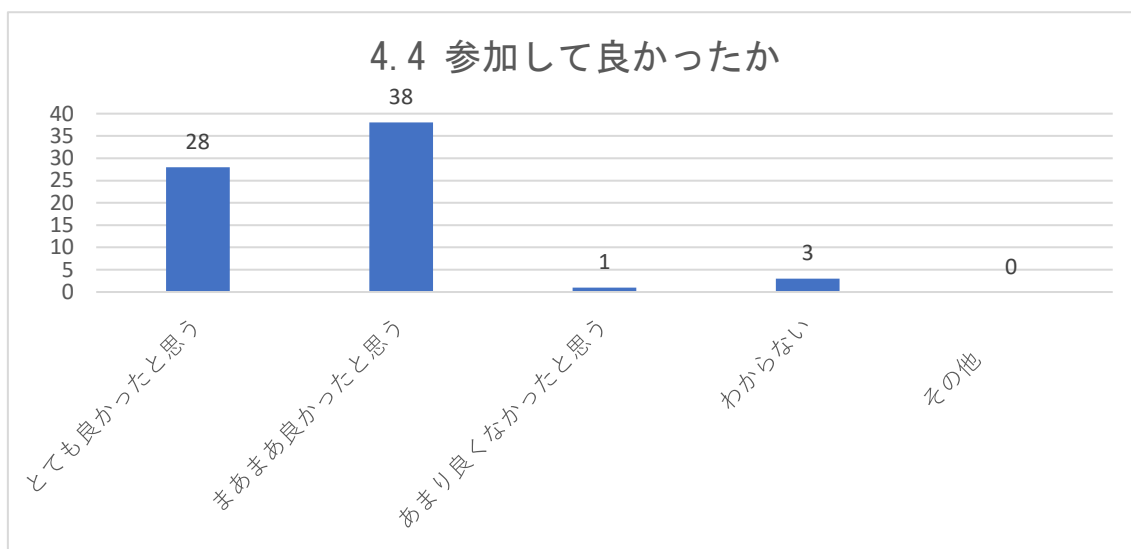
「大いに上がったと思う」と「少し上がったと思う」と答えた学生が 81.4% (57/70) であった。

4.3 勉強意欲を高めるモチベーションになりましたか？ 1つ選んでください。



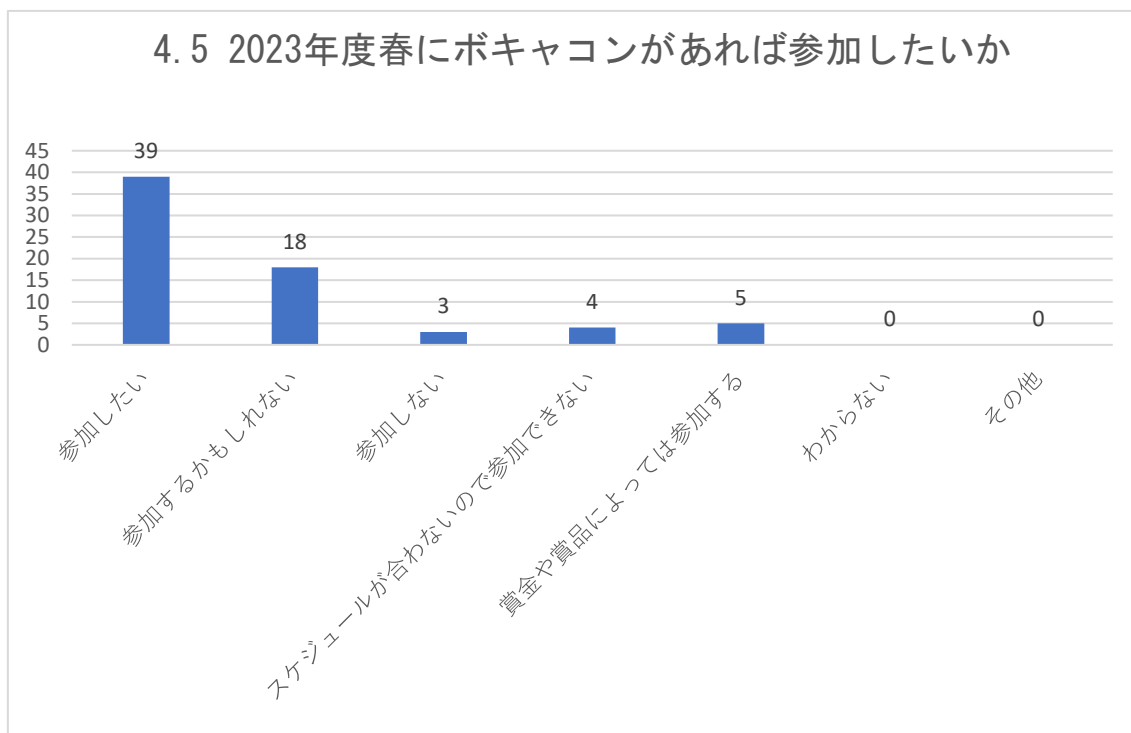
88.6% (62/70) の学生がある一定以上、ボキャコンが勉強意欲を高めるモチベーションになったと答えた。「少しなったと思う」と答えた学生が 61.4% (43/70) で多数派だった。

4.4 今回のボキャコンに参加して良かったですか？ 1つ選んでください。



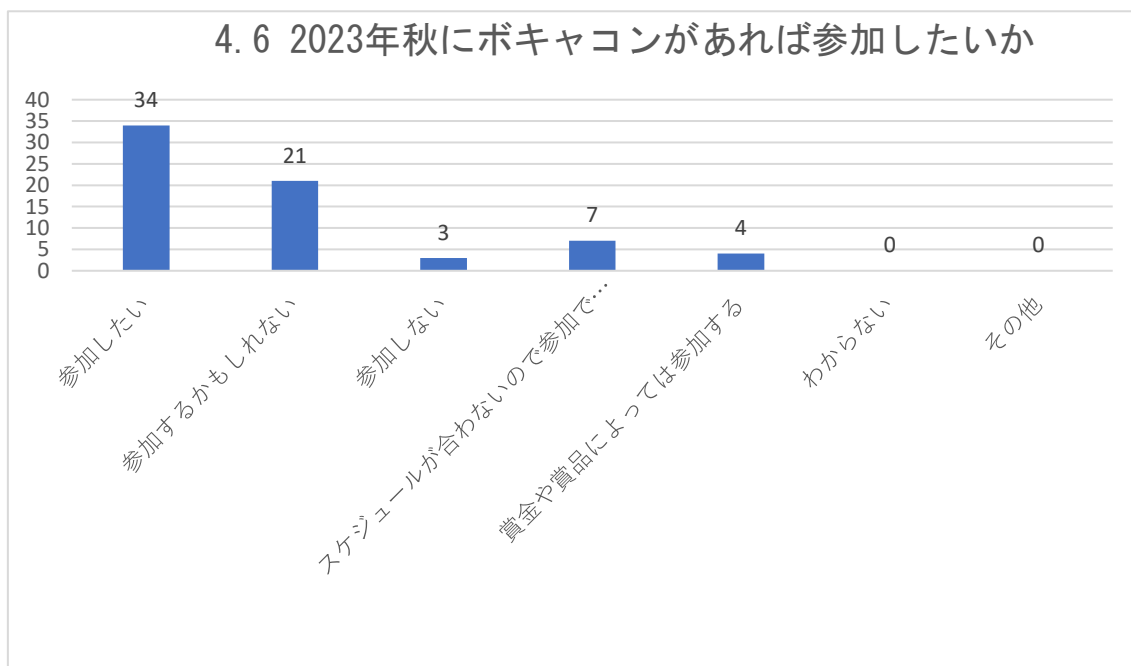
参加して良かったと思える学生は 94.2% (66/70) で、3.3 のモチベーションになったと答えた学生 (88.6%、62/70) より高い割合だった。

4.5 来年の春休み明けにボキャコンがあれば参加したいですか？ 1つ選んでください。



今回のボキャコンに参加した学生の過半数は「参加したい」（56.5%、39/69）という意志を表明している。

4.6 来年の夏休み明けにボキャコンがあれば参加したいですか？ 1つ選んでください。



4.5の結果と同様な傾向が見られるが、「参加したい」と答えた学生数が5名減っている。

5. 考察

本節では、3 節と 4 節で提示したデータに関して、考察を行う。

登録学生・参加学生について

登録した学生の学類分布では、理系学生も 37.4% (55/147) おり、文系学生に比べると割合的には少ないが、それでも一定数このようなイベントに参加しようという意欲がある学生がいることがわかる。その一方で、実際に参加した（理系と文系の）学生は 70 名で、登録した学生（147 名）の半分以下であったのは残念な結果だった。夏休み前の登録時にはモチベーションが高かったと思われるので、そのモチベーションを維持できるような働きかけ（定期的に開催日が近づいていることを知らせるメールを送る等）をする必要があるかもしれない。

登録学生、参加学生ともに 1 年生が 50%を超え、2 年生、3 年生、4 年生の順に割合は減っている。登録者と参加者を比べると全体に占める 1 年生と 3 年生の割合はほぼ同じだが、4 年生は参加学生の方が割合は減っていて 2 年生は増えている。1 年生が多いのは、教養教育の講義棟やその近くにある学生会館にポスター掲示を多くしたことと関係があるかもしれない。4 年生の割合が減ったことには更に調査や対策が必要であろう。

参加学生の学類内訳では、学校教育学類の参加人数（全体の 20%、14/70）は目を引く。考えられる可能性として、英語教員を目指している学生が教員採用試験を視野に入れて、夏休みの英語学習に力を入れたのかもしれない。一方、理系の参加学生の割合は 25.7%(18/70) で、実際に参加した学生の割合は登録した学生の割合 37.4% (55/147) から減った。理系の学生のモチベーションを高める方策を考える必要がある。

今回は初期イベント案内（ポータルからのメッセージ、ポスター、チラシ、配布物）には力を入れたが、継続的周知方法は学生が日ごろから目にするポスターのみであり、メッセージによるリマインダーは出さなかった。教員による周知は 1 年生の教養英語科目担当教員には直接依頼したが、その他の依頼は会議の場など一部の教員を通じて行った。ポスター、チラシ、配布物、教員からの働きかけとも 1 年生により広範に届いた可能性はある。また、開催場所が総合教育講義棟であったので、1 年生にとって会場までの心理的距離が近かったことも考えられる。理系講義棟での開催や継続的周知の取り組みなども考慮し、少なくとも登録した学生が着実に参加する方策を検討する必要があるだろう。

学生の得点と出題した問題の難易度について

参加学生 70 名の平均点は、62.4 点であった。これは、実行委員の想定（70 点）より低かった。2 つの理由が考えられる。1 つは、学生の準備不足である。30 名の学生が 60 点以下だったことから、このイベントのために夏休み中十分学習しなかった学生が少なからずいたことが考えられる。2 つめの理由としては、学生の実力に比べて難問が多かったことであろう。上述のとおり、20%は課題本以外の語彙から問題を作成したが、それらの問題で得点を得ることができなかった学生が多々いた。（学生の得点分析はまた別の論考で行う予定で

ある。) 次回の問題は少し難易度を下げる必要があるかもしれない。

アンケート結果について

アンケート結果から参加した学生の過半数は、今回のボキャコンを有意義なものであったと考え、チャンスがあればまた参加したいと思っていることがわかった。このアンケートに答えた学生は、参加義務はないにも関わらず、自ら登録を行い、積極的に行動した学生である。このような自由参加型のボキャコンも開催意義があると確認できる結果となった。以下、それぞれの項目について考察する。

・参加理由

英語力を上げる、外部試験のスコアアップ、実力を知る、など英語の力やそれによって得られる効果を意識した回答が多かったことは、ボキャブラリーコンテストを実施するにあたって実行委員会が目標とした学生の自律的英語学修機会の創出と合致し、開催の意義があったと言える。また、賞金を稼ぐため、という回答も多かったことから、賞金が学生にとって目指す価値があるレベルの額であったと考えられる。1位1万円は教育イベントとしては高額すぎるという懸念はあったが、複数回答可であったとはいえ参加学生の約半数が賞金を理由の一つに挙げていることから、ある程度高額の賞金は参加のモチベーションになることがわかった。

・語彙力向上に関する意識

コンテスト準備として繰り返し語彙習得をはかれば、語彙力はあがると思われるが、「大いに上がったと思う」を選んだ学生は8名のみであった。課題本を出すことで、出題範囲が明らかになり、学習意欲の向上にもつながると想定したが、実行委員が期待した程は課題本を完璧に学習した学生は少なかったものと思われる。

・モチベーション向上に関する意識

モチベーションが「大いに」向上したと考える学生と、「少し」向上したと考える学生の合計は全体の88.6% (62/70) であったので、このイベントは一定程度学生の勉強意欲を高める役割を果たしたと考えられる。とは言うものの、「少しなったと思う」と答えた学生が61.4% (43/70) で多数派であることから、実行委員が期待したほどはモチベーション向上につながらず、その結果が想定よりも低い平均点となって表れていると言えよう。今後モチベーションの向上に対する問いに「大いになったと思う」と答える学生を増やすための手段を考える必要がある。上述のとおり、賞金に興味がある学生が多いので、賞金を増やす、賞金を獲得する学生数を増やす、ある一定の得点の学生には全員賞金を与える等の手段を考えることもできるかもしれない。また、地域の商店や飲食店等と連携して、賞金だけでなく商品券などの賞品を加えてイベント性を高めることも効果があるかもしれない。

・参加に関する意識

このイベントに参加して「とても良かった」「まあまあ良かった」と9割以上の学生が答え、否定的な意見の学生が1割に満たなかったことは、ボキャコン開催の意義をはかる上でポジティブな結果と言える。コンテスト順位が発表された時には、学生同士が入賞者を拍手で称え、イベント終了後は笑顔で挨拶して帰っていく学生が多く、会場の雰囲気はとても良かった。学生は個々にこのイベント参加の準備をしてコンテストに臨んだとしても、このように時間と場所を共有し、お互いに高め合い刺激を受け合える場があることは、自律的学修の成果を高める関係性構築の機会 (Ryan, 1991) を提供したという意味で、有意義であったと言えるだろう。

・次回の参加に関する意識

半年後、1年後のボキャコンにも挑戦したいと前向きな回答をした学生が、過半数であることは、次回開催に向けての明るい材料である。4.5 と 4.6 の結果で明らかのように、半年後の参加に前向きな学生が1年後の参加に前向きな学生より5名多いことは、より頻繁な開催を学生が望んでいると解釈することもできるかもしれない。

6. 未来創成教育環におけるボキャコンのあり方

今回のボキャコンは金沢大学で開かれるものとしては、久しぶりのイベントであった。現外国語教育系のほとんどの英語教員にとっては初めての体験であった。今回の取り組みで、このようなイベントを開催するためのノウハウはある程度把握することができた。「はじめに」で述べたとおり、金沢大学は4年間一貫した英語教育を実施するために、未来創成教育環を設置したが、この組織の中でボキャコンをどう発展させていくかについて本節で考察する。

まず、ボキャコンは継続させるべきであろう。金沢大学は大学憲章(2004)で「自学自習」を教育の基本とし、大学未来ビジョン『志』(2022)で「自ら学び・自ら育む」教育環境の整備を掲げており、大学の方針として、自分から積極的にチャレンジできる人材を養成しようとしている。特に、未来創成教育環は、教養教育・専門教育という区別や学年にかかわらず、全学生な一貫教育を提供する組織として設立されており、「教育」の概念も特定学類・特定年次に授ける特定知識や教室での学びだけではないより広い視点で、流動的な新しい世界をリードできる人材育成に焦点を当てている。そのような教育の核となるのは、学生が与えられたものを習得するだけでなく、自ら学びを開拓できる学術リテラシーと「自学自修」¹⁾の姿勢である。例えば1990年後半からイギリス等海外の高等教育で盛んに取り入れられるようになった「トランスファラブル・スキル」教育 (Training Agency, 1990; Bridges, 1993)

¹⁾ 大学憲章が作られた2004年では「学習」という表現が一般的だったが、20年近く経た2023年において高等教育については、「学修」という表現を使うことが多いようであるため、本稿では、「自学自修」を採用する。

や学生選択の幅を広げるモデュラー制 (Goldschmid & Goldschmid, 1973) 等により大学教育は多様化の傾向を強め、新型コロナウイルス感染症による社会変化の後には教育形態もより多様化している (Brenan, 2021)。金沢大学でも近年プログラム制の導入や未来創成教育環の設置など、よりフレキシブルな教育へと移行しているが、自学自修する学生をサポートする手段として、ボキャコンを開催することは有効であると言える。また、大学後の人生を見据えた学生の支援にもこのようなイベントは有効であろう。教員採用試験の準備をしている学生や、大学院の英語の入試準備が必要な学生、あるいは就職先に TOEIC のスコアを提出することを要求される学生も少なからずいると思われるからである。

自学自修は孤独な活動である必要はない。学生がそれぞれコツコツと自分で学ぶことは大切であろうが、大学としてイベントの形でそれらの学生がより楽しく努力できるよう、支援の一環としてボキャコンを提供することは価値があると思われる。

開催回数としては、継続的に学生がこのイベントに参加することを目指すならば、年に 2 回開催することが必要ではないか。年に 1 回では間延びしてしまうが、長期休暇明けごとに年 2 回のチャンスがあれば目標が定めやすく、チャレンジする学生の数も増えるかもしれない。学生は在学中に最高 8 回参加できるため、コツコツとチャレンジし続けることで英語力の強化のみならず、自ら積極的に挑戦し続ける人材を養成する意味でも有益だと思われる。繰り返すが、アンケート結果より、半年後のボキャコン開催を望む学生は 1 年後の開催より多い。年に 2 回開催してやる気のある学生のニーズに応えることは意義があると言える。

参加学生を増やす方策としては、授業との連携も検討する価値がある。もちろん上述したように、学生の自主性を重んじることは重要であるが、なるべく多くの学生に参加させることを目的とするならば、自由参加ではなく 2 年次以降の学生を対象とした必修英語クラスなどで、ボキャコンを必須にすることも一つの選択肢となるかもしれない。実現可能な方法として、ボキャコンを単位認定の 1 つ (成績評価の 10~20% など) とするという方法が考えられる。

授業に組み込む場合、学生はボキャコンに参加するか、参加をしない場合には、LMS 上で、e-learning となったその年度のボキャコンの問題で合格点 (例えば 100 問で 95 点以上) を取るまで何度もチャレンジすることを単位修得の条件とするのが良いのではないか。学生はボキャコンに参加することを選択しても良いし、LMS で同じ年のシャッフルされた過去問を合格点が出るまで解くことを選択しても良い。このような選択の自由を与えれば、多くの学生が自分なりの方法で語彙習得に繋がる活動を選ぶようになるかもしれない。

英語教員が作成した問題を同じ年度内でリサイクルすることは、問題作成した教員の努力が多数の学生が解くことでより報われることにもなる。また、LMS に常備サイトを作り、旧年度の問題を、蓄積していくことにより、著作権フリーの金沢大学の e-learning 教材を学生にオファーできる。今後のボキャコンを見据えて、教員は専門家から知見やアドバイスを得るなど、問題作成に備えた FD 研修も進んでいる。実際、2022 年 9 月 7 日と 14 日の 2 日にわたり、TOEIC 対策・研究の第一人者であるヒロ前田 (前田広之) 氏を迎えて、英語教員を

対象にボキャコン・入試等のための語彙問題作成セミナーを開催した。非常に有意義な研修となったと多くの参加教員が感想を述べている。「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」は英語教員の教育に対する士気を更に高めたと言えるだろう。

7. 終わりに

本稿は、金沢大学で設置された未来創成教育環において、どのようにして2年次以上の学生の英語学習機会を充実させるかというミッションのもと、パイロット研究として行った「金沢大学ボキャブラリーコンテスト 2022」を検証した。概要と結果を説明し、参加学生の動機や感想を明らかにし、未来創成教育環への生かし方を考察した。学生の自律的学修支援としては、デジタル教材、教員の関与、ライティングセンター等の支援設備の利用等がよく提案されるが、ボキャコンのようなイベント形式の学修支援も教育の一環として続けていくことは、学生の自学自修のモチベーション向上に寄与し、意義のある取り組みであると提言したい。

参考文献

- Brennan, J. (2021) Flexible learning pathways in British higher education: A decentralized and market-based system. (Report for the IIEP-UNESCO Research ‘SDG 4: Planning for flexible learning pathways in higher education’). *UNESCO*.
<https://www.qaa.ac.uk/docs/qaa/about-us/flexible-learning-pathways.pdf>
- Bridges, D. (1993) Transferable skills: a philosophical perspective. *Studies in Higher Education*, 18 (1): 43-51.
- Goldschmid, B., & Goldschmid, M. L. (1973) Modular instruction in higher education: A review. *Higher Education* 2(1): 15-32. <http://www.jstor.org/stable/3445757>
- Littlewood, W. (1996) Autonomy: An anatomy and a framework. *System* 24: 427-435.
- Littlewood, W. (1999) Defining and developing autonomy in East Asian Contexts. *Applied Linguistics* 20(1): 71-94.
- Liu, Y-J., Zhou, Y-G., Li, Q-L., & Ye, X-D. (2022) Impact study of the learning effects and motivation of competitive modes in gamified learning. *Sustainability* 14(11): 6626.
<https://doi.org/10.3390/su14116626>
- Milstein, N., Striet, Y., Lavidor, M., Anaki, D., & Gordon, I. (2022) Rivalry and performance: A systematic review and meta-analysis. *Organizational Psychology Review* 12(3): 332-361.
<https://doi.org/10.1177/20413866221082128>
- Ryan, R.M. (1991) The Nature of the self in autonomy and relatedness. In Strauss J., & Goethals G. R. (eds.), *The Self: Inter-disciplinary Approaches*. New York: Springer. 208-238.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002) Overview of self-determination theory: An organismic-dialectical perspective. In Deci E. L., & Ryan R. M. (eds.), *Handbook of Self-determination Research*. Rochester: University of Rochester Press. 3-33.

Training Agency (1990) *Enterprise in Higher Education: Key features of Enterprise in Higher Education proposals*. Sheffield: Training Agency.

阿部恵・太田徹 (2017) 「グローバル高専プロジェクト」『八戸工業高等専門学校紀要』第 51 号 145-148.

金沢大学 (2004) 「金沢大学憲章」 <https://www.kanazawa-u.ac.jp/university/constitution>

金沢大学 (2022) 「金沢大学未来ビジョン『志』」

<https://www.kanazawa-u.ac.jp/university/management/plan>

金沢大学附属図書館 (2023) 『金沢大学附属図書館報 こだま』第 212 号

金沢二水高等学校ウェブサイト (2005) 「ボキャブラリーコンテスト」

<https://www.ishikawa-c.ed.jp/~nisuih/super/bokyabura-kon.html>

白井聖大 (2012) 「中等教育における外国語コミュニケーション能力向上のための複言語教材開発研究」『日本私学教育研究所紀要』第 48 号 45-48.

長崎大外国語大学ウェブサイト「英語ボキャブラリーコンテストの歴史(第 1 回～第 15 回)」

https://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/ccrcc/evc_result/

名古屋工業大学ウェブサイト「工大英単語コンテスト」

<http://language.sakura.ne.jp/y/doc/egst/contest.html>

兵庫県三田祥雲館高等学校ウェブサイト「21 回生の日常風景<road to ボキヤコン>1 月 13 日(金)」 <https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/shoun->

[hs/NC3/blogs/blog_entries/view/101/b602fb2207e2236ec08f5376475922f6?frame_id=3023](https://dmzcms.hyogo-c.ed.jp/shoun-)

宮島宏幸 (2012) 「岡山東商業高校ボキャブラリー・コンテスト—『Value 1000』を使って」『CHART NETWORK』第 68 号 https://www.chart.co.jp/subject/eigo/eigo_cnw.html

<https://www.chart.co.jp/subject/eigo/cnw/68/68-3.pdf>

巻末 1：開催案内ポスター



